慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	幼稚園教諭志望学生における教師の達成目標志向性尺度の作成
Sub Title	Development of a teachers' achievement goal orientation scale for kindergarten teacher trainees
Author	金子, 智昭(Kaneko, Tomoaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2016
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.82 (2016.) ,p.37- 44
JaLC DOI	
Abstract	Teachers' motivation determines the quality and orientation of their daily educational activities and significantly affects the academic results of children. Recent studies on teachers' motivation have been conducted overseas. Therefore, a scale for assessing achievement goal orientation in Japanese preschools, based on the well-known goal achievement theory of motivation, was developed. Participants were students training to become kindergarten teachers (N = 111, 16 men and 95 women). Factor analysis was conducted on 16 items selected based on previous studies, and "Achievement Goal Orientation Scale for Aspiring Kindergarten Teachers" was developed. The scale comprised 12 items and four sub-scales : mastery goals, performance-approach goals, performance-avoidance goals, and relationship goals. The scale demonstrated sufficient reliability (α = .67 ~ .84). External validity of the scale was examined using the learning effects of the Micro Teaching (MT) lessons that provide students with practical teaching experience, including simulation of childcare. Moreover, multiple regression analysis assessed four indexes of MT efficacy including meta-cognition of learning states and learning motivation ; teaching skills and understanding of small children ; and understanding practical issues and practical difficulties as independent variables. The four sub-scales of achievement goals were construed as dependent variables. Results indicated that only mastery goals had positive effects on all four MT indexes, which supported our hypothesis. Finally, the study discusses the limitations of this study and future directions.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000082-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幼稚園教諭志望学生における教師の達成目標志向性尺度の作成
Development of a Teachers' Achievement Goal Orientation Scale for Kindergarten Teacher Trainees

金　子　智　昭*
Tomoaki Kaneko

Teachers' motivation determines the quality and orientation of their daily educational activities and significantly affects the academic results of children. Recent studies on teachers' motivation have been conducted overseas. Therefore, a scale for assessing achievement goal orientation in Japanese preschools, based on the well-known goal achievement theory of motivation, was developed. Participants were students training to become kindergarten teachers (N＝111, 16 men and 95 women). Factor analysis was conducted on 16 items selected based on previous studies, and "Achievement Goal Orientation Scale for Aspiring Kindergarten Teachers" was developed. The scale comprised 12 items and four sub-scales: mastery goals, performance-approach goals, performance-avoidance goals, and relationship goals. The scale demonstrated sufficient reliability (α＝.67～.84). External validity of the scale was examined using the learning effects of the Micro Teaching (MT) lessons that provide students with practical teaching experience, including simulation of childcare. Moreover, multiple regression analysis assessed four indexes of MT efficacy including meta-cognition of learning states and learning motivation; teaching skills and understanding of small children; and understanding practical issues and practical difficulties as independent variables. The four sub-scales of achievement goals were construed as dependent variables. Results indicated that only mastery goals had positive effects on all four MT indexes, which supported our hypothesis. Finally, the study discusses the limitations of this study and future directions.
Key words: achievement goal orientation, kindergarten teacher trainees, micro teaching, learning effect, development of scale
キーワード：達成目標志向性，幼稚園教諭志望学生，マイクロティーチング，学習効果，尺度作成

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻

1．問題と目的

教師の職務内容に対する動機づけは，教師の日々の教育実践の質や方向性を決定づけ，さらに，子どもの学業成果にも多大な影響を与えると考えられる。近年，こうした教師の動機づけを研究対象として扱うことの重要性に鑑み，諸外国を中心として，教師の動機づけ研究への関心が徐々に高まってきている（Richardson, Karabenick, & Watt, 2014 など）。

代表的な動機づけ理論の一つとして，達成目標理論（achievement goal theory）を挙げることができる。達成目標理論とは，達成状況下における個人の目標性の相違に着目した理論であり，一人ひとりが持つ目標の違いによって，当人の認知，感情，行動のパターンに変化が生じると考えられている（Murayama, Elliot, & Friedman, 2012; 村山，2003）。

達成目標理論を教師に適用した早期研究として，Butler（2007）は，学校は子どものみならず教師においても何らかの達成が要求される場であることを主張し，教師の教授行動に対する比較的安定した特性としての達成目標志向性（achievement goal orientation for teaching）の概念を提唱した。達成目標の分類は，各研究者間（Butler, 2012, 2007; Nitsche, Dickhäuser, Fasching, & Dresel, 2011; Papaioannou & Christodoulidis, 2007 など）で若干の相違はあるものの，総じて，(a) マスタリー目標（mastery goal: 教師としての専門性や力量を形成し発展させることが目標），(b) パフォーマンス接近目標（performance-approach goal: 優れた教授能力を他者に示すことが目標），(c) パフォーマンス回避目標（performance-avoidance goal: 劣った教授能力を他者に披露することを避けることが目標），(d) 仕事回避目標（work-avoidance goal: 少ない労力で職務を遂行することが目標），(e) 関係性目標（relational goal: 子どもとの親密な関係性を構築したり関係性に配慮したりすることが目標）の5つの目標が提起されている[1)]。

上記のような教師の達成目標の概念と測定に関する研究が行われるのと同時に，教師の達成目標は，教師の認知や教育実践と深い関連を示すことが明らかとなってきた。第一に，教師の認知との関連について，マスタリー目標が高い教師は，パフォーマンス回避目標や仕事回避目標が高い教師よりも，教職に対する満足感や教授行動に対する興味が高く，バーンアウトが低いことが示されている（Retelsdorf, Butler, Streblow，& Schiefele, 2010; Papaioannou & Christodoulidis, 2007）。さらに，マスタリー目標が高い教師は問題焦点型コーピング（problem-focused coping）を媒介にバーンアウトを低下させている一方で，パフォーマンス回避目標が高い教師は情動焦点型コーピング（emotion-focused coping）を媒介にエンゲイジメントが低下しバーンアウトが高まってしまう傾向がある（Parker, Martin, Colmar, & Liem, 2012）。

第二に，教育実践との関連について，マスタリー目標や関係性目標が高い教師は，授業内において，個人内評価の多用，子どもの自律性や興味の促進，社会的サポートの提供など，“学習者中心型”の効果的な指導を媒介に，子どもの学習内容への興味や援助要請を高めることが実証されている（Butler & Shibaz, 2014, 2008 など）。その一方で，パフォーマンス接近・回避目標や仕事回避目標が高い教師は，成績比較により競争を煽るような個人間評価の多用，子どもからの質問や援助要請の抑制，暗記中心の授業展開など，“教師主導型”の指導を行いやすいことが明らかとなっている（Retelsdorf & Günther, 2011 など）。

このように先行研究を概観すると，教師の達成目標は，教師自身の認知や指導行動のみならず，子どものアチーブメントに対しても広く影響を与える有力な概念であることが示されている。ただし，既存

の達成目標に関する研究は，小・中・高等学校の現職教諭（Butler, 2007など）や教育実習生を対象としているが（Nische et al., 2011），幼稚園教諭や幼稚園教諭志望学生を対象とした幼児教育分野における達成目標研究は見当たらない。

学校教育法において，「幼稚園は，義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして，幼児を保育し，幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて，その心身の発達を助長することを目的とする」と記されている。また，現行の幼稚園教育要領の「第1章総則」には，幼児教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり，幼児の自発的な活動である遊びを重視した教育を行うことが義務づけられている。このように，学齢期の教育と幼児教育との間には，教育の対象者，教育目的，教育方法などにおいて相違がみられる。その点において，現職の幼稚園教諭や幼児教育を専攻する教職志望学生は，既存の達成目標研究での対象者である小・中・高等学校の現職教諭及び教育実習生と同様の達成目標を持っているのかどうか，その構成概念を確認する必要があると考える。そこで本研究では，幼稚園教諭志望学生を対象として，幼児教育分野に適した達成目標志向性尺度を作成することを目的とする。

なお，作成した尺度の外的妥当性を検討するにあたり，マイクロティーチング（以下，MT）を取り入れた演習形式の授業に対する学生の学習効果を妥当性の指標として用いる。MTとは，スタンフォード大学の研究者らによって開発された教授スキルの訓練方法であり，通常の授業に比べて少人数で，授業内容も短縮して短時間で教えることによって，特定の教授スキルの習得を目指すものである（金子，2013）。学習効果を検証のためには，全ての調査対象者が一定の学習経験を受けることにより条件を統制する必要があり，その点において，MTという教育方法に着目した。本来であれば現職の幼稚園教諭を対象にすべきであると考えられるが，多忙な現職教諭を一定人数集めてMTを行うことは極めて困難を伴うため，本研究では幼稚園教諭志望学生を対象とする。マスタリー目標が高い教職志望学生は，講義内容を教師に求められる専門性や力量を伸ばすための有益な情報源と認識しやすいと考えられるため，講義後の学習効果がより高まることが予想される。

2. 方法

2.1 対象者及び訓練手続き

埼玉県内の4年制A大学1学年の幼稚園教諭志望学生111名（3クラス：A組36名，B組38名，C組37名，性別：男性16名，女性95名）を対象とした。2015年11月から2016年1月にかけて，保育心理学の演習形式の講義の一貫として，クラス別に6コマ（1コマ90分）を使用し，学生が幼児役と教師役となる模擬保育形式の「簡易型MT」が実施された[2)]。

クラス別に3班に分け，1つの班18人程度が幼児役となり2つに分かれて，他の2つの班の教師役の学生から指導を受ける。教師役ではない学生は，観察者となり記録をとる。訓練手続きは，(a) 各班で指導案と教材作り，(b) 各班で模擬保育の練習，(c) 指導実践，(d) 1回目の反省を生かして再度指導実践，(e) 班別反省会，(f) 学習成果の公表と教員の総評，である。全ての訓練手続きが終了した1週間後，学生にアンケート用紙を配布し記入を求めた。

2.2 調査内容

2.2.1 達成目標志向性の尺度項目の作成

既存の達成目標志向性の尺度（Butler, 2012, 2007など）を参考として，幼稚園教諭が担う教育活動に

適した文言へ修正を試みた。本来は，既述の5観点であるが，対象者が学生であることを考慮して，仕事回避目標を除いた4つの観点（マスタリー目標，パフォーマンス接近目標，パフォーマンス回避目標，関係性目標）を採用した。仕事回避目標は，例えば，“遠足のために授業がなくなった時”，“教える内容が簡単で教材準備の手間が省けた時”に教師が達成感を感じるという項目内容で構成されている（Butler, 2007）。仕事回避目標は，教育現場に長く身を置き，日常的に職務を遂行する中で初めて実感できる目標と考えられる。その点，現場経験の少ない幼稚園教諭志望学生には想定しにくい内容と判断し，仕事回避目標を除くこととした。

各観点の項目を作成するに当たり，心理学を専攻する大学院生1名，幼児教育分野の心理学を専門とする大学教員2名の計3名により，（a）項目が測定概念を適切に反映しているか，（b）項目表現は分かりやすいか，（c）項目数は適切か，の3点について，数回の議論を重ねて項目を選定した。最終的に，1つの観点につき4項目ずつの計16項目を作成した。項目例として，マスタリー目標は“保育を通して，自分自身の学びが深まった時”など，パフォーマンス接近目標は“自分のクラスの製作が，他のクラスよりも優れていた時”など，パフォーマンス回避目標は“保育者としての力量が乏しいことを，同僚や管理職などに気づかれなかった時”など，関係性目標は“子ども（たち）と遊びの楽しさを共有できた時”など，である。教示文は，「将来あなたが保育者（教育者）となってクラスを担任した時，どのような場合に充実感や達成感を感じると思いますか」とした。「あてはまる」を4点，「あてはまらない」を1点とした4段階で回答を求めた。

2.2.2　尺度の妥当性を確認するための質問紙

学習効果を測定する指標として，「簡易型幼稚園教員養成用マイクロティーチング有効性測定尺度」（金子，2013）を用いた。本尺度は，“保育・教育者として，自分のよいところ，改めなければならないところがわかった（学習状態のメタ認知：保育者の資質）”など「学習状態のメタ認知と学習意欲」に関する15項目，“落着かず活動をやらない子など，無理なく活動に引き込む方法を学んだ（不参加児などへの対処）”など「指導技術と幼児理解」に関する9項目，“指導上，必要となってくる配慮点をもりこんで，立案する方法を理解できた（ポイントの置き方：配慮）”など「実践のポイントの理解」に関する8項目，“1つ1つの幼児の活動についても，その過程を考えながら深く意味を追求して書くといった立案の難しさを理解した（立案の難しさの自覚）”など「実践の難しさ」に関する5項目，以上の4下位尺度計37項目から構成される。

教示文は，「指導案作成・模擬保育・実地指導というマイクロティーチングを通して，自分自身にどのような効果がありましたか」とした。「あてはまる」を4点，「あてはまらない」を1点として4段階で回答を求めた。

3.　結果と考察

3.1　幼稚園教諭志望学生版達成目標志向性尺度の因子構造

作成した達成目標志向性に関する16項目に対して，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。その結果，固有値の減少推移（3.69, 2.73, 1.51, 1.32…）と解釈可能性から，4因子構造が妥当であると判断した。次に，因子負荷量が.40以上の基準を設け，それらに合致しない項目を削除しながら，繰り返し因子分析を行った。最終的に，12項目から成る「幼稚園教諭志望学生版達成目標志向性尺度」を作成した（Table 1）。第1因子は「パフォーマンス回避目標」に関する3項目（α=.84），第2因子は「関係

性目標」に関する3項目（α=.81），第3因子は「マスタリー目標」に関する4項目（α=.67），第4因子は「パフォーマンス接近目標」に関する2項目（α=.72）であった。第3因子のマスタリー目標のα係数の値は若干低いものの，全体的に概ね満足しうる値が示された。

因子分析の結果として除外された4項目は，「管理職など目上の人が，同僚の保育者よりも，指導能力を高く評価した時」（M=3.25, SD=.74），「公開保育で，自分自身の優れた指導能力を示すことができた時」（3.15, .73），「大きな問題なく，一日を終えることができた時」（3.55, .55），「子ども（たち）が自分自身を信頼してくれていると感じた時」（3.89, .36）であった。これらの項目には，“公開保育”など，幼稚園教諭就任後に実地経験を積むことでイメージしやすい内容が多く含まれていた。

3.2　達成目標と学習効果との関連

簡易型MTの各下位尺度のα係数は，「学習状態のメタ認知と学習意欲」（α=.83），「指導技術と幼児理解」（α=.73），「実践のポイントの理解」（α=.63），「実践の難しさ」（α=.63）であり，一定の信頼性が確認された。次に，達成目標と学習効果の間の相関係数を算出したところ，マスタリー目標は学習効果の4つの指標と正の関連（r=.25～.54, p<.01），パフォーマンス接近目標は「実践の難しさ」と正の関連（r=.20, p<.05），パフォーマンス回避目標は「実践のポイントの理解」と負の関連（r=.19, p<.05），関係性目標は「学習状態のメタ認知と学習意欲」「実践のポイントの理解」「実践の難しさ」と正の関連（r=.19～.29, p<.01～.05）が得られた。最後に，達成目標の4つの指標を独立変数，簡易型MTの有効性のそれぞれを従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。有効性の各下位尺度に対する決定

Table 1　幼稚園教諭志望学生の達成目標の因子構造（最尤法・プロマックス回転）

項　目	M	SD	F1	F2	F3	F4	h^2
F1: パフォーマンス回避目標（α=.84）							
保育者としての力量が乏しいことを，同僚や管理職などに気づかれなかった時	1.67	.80	**.95**	.00	.02	−.03	.88
自分のクラスの製作が，他のクラスよりも劣っていることを周囲に気づかれなかった時	2.87	.79	**.86**	.14	−.11	.01	.69
クラスをまとめられないでいる自分の指導能力の低さを，同僚や管理職などに気づかれなかった時	1.64	.76	**.62**	−.24	.17	.09	.55
F2: 関係性目標（α=.81）							
子ども（たち）と温かい関係性を，築くことができた時	3.88	.35	−.04	**.88**	−.14	.01	.71
子ども（たち）と遊びの楽しさを共有できた時	3.86	.37	.11	**.71**	.15	−.06	.55
遊びを通して，子ども（たち）との一体感を持てた時	3.83	.40	−.08	**.68**	.11	.08	.61
F3: マスタリー目標（α=.67）							
保育を通して，自分自身の学びが深まった時	3.53	.58	−.05	−.06	**.81**	−.11	.60
子ども（たち）の実態に即した保育計画を立てることができた時	3.54	.60	−.11	.19	**.58**	.09	.52
保育を通して，自分自身の指導改善を実感した時	3.40	.65	.03	−.06	**.51**	.09	.25
子ども一人ひとりを把握する力がついてきたと感じた時	3.66	.53	.14	.11	**.41**	−.02	.21
F4: パフォーマンス接近目標（α=.72）							
自分のクラスが，他のクラスよりも規律正しかった時	2.92	.76	−.05	−.06	−.04	**1.02**	.99
自分のクラスの製作が，他のクラスよりも優れていた時	2.87	.79	.14	.13	.07	**.54**	.38
因子間相関　F1				−.35	−.06	.17	
F2					.45	.18	
F3						.13	

Table 2　簡易型ＭＴの有効性に及ぼす達成目標の影響

	学習状態のメタ認知と学習意欲		指導技術と幼児理解		実践のポイントの理解		実践の難しさ	
	r	*β*	*r*	*β*	*r*	*β*	*r*	*β*
マスタリー目標	.54**	.51**	.36**	.37***	.25**	.22*	.39**	.35***
パフォーマンス接近目標	.09	−.02	.14	.11	.13	.14	.20*	.16
パフォーマンス回避目標	.03	.10	−.02	−.03	−.19*	−.20	−.09	−.12
関係性目標	.29**	−.09	.14	−.04	.19*	.02	.26**	.04
R^2		.31***		.14**		.11*		.19***

注．*p<.05, **p<.01, ***p<.001

係数は，R^2=.11～.31（p<.001～.05）となり，全てにおいて有意となった。標準偏回帰係数について，マスタリー目標は,「学習状態のメタ認知と学習意欲」(β=.51, p<.001),「指導技術と幼児理解」(β=.37, p<.001),「実践のポイントの理解」(β=.22, p<.05),「実践の難しさ」(β=.35, p<.001）に正の影響を与えていた。マスタリー目標のみが，簡易型ＭＴの有効性における全ての指標に対して，正の影響を及ぼしていることが示された（Table 2)。

その一方で，パフォーマンス接近目標・パフォーマンス回避目標・関係性目標の3つの指標は，相関分析の結果では有意な関連が見られたが，重回帰分析においては関連性がなかった。とりわけ，関係性目標は学習効果の3つの指標と広く関連していたが，関係性目標それ自体が学習効果に及ぼす影響は示されず，興味深い知見が得られた。関係性目標のような利他的動機づけは，対人関係職に特徴的な動機づけであり（Butler, 2012)，教職への継続意志の強さなど学生のエンゲイジメントを規定する（Watt, Richardson, & Wilkins, 2014; Watt & Richardson, 2008)。このように，子どもとの親密性を重視する関係性目標は，子どもを相手とする教職本来の特質を踏まえると，教職志望学生にとって欠かすことのできない重要な目標と言える。しかしながら，講義を通した学習効果の向上という観点においては，関係性目標よりはむしろ，マスタリー目標のような教師としての専門性や力量を伸ばすことに力点を置いた目標の方が好ましいと考えられる。

4.　本研究のまとめと課題

本研究では，幼稚園教諭志望学生を対象に，幼児教育分野に適した達成目標志向性尺度を作成することを目的とした。因子分析の結果，第1因子から順に，パフォーマンス回避目標，関係性目標，マスタリー目標，パフォーマンス接近目標の4下位尺度から構成される幼稚園教諭志望学生版達成目標志向性尺度が作成された。幼稚園教諭志望学生においても，先行研究と同様の達成目標の因子構造が確認された。また，マスタリー目標のα係数は若干低かったものの，下位尺度全体としては，一定の信頼性を得ることができた。

尺度の外的妥当性に関する検証では，マスタリー目標のみが学生のＭＴにおける学習効果に正の影響を与えており，本研究の仮説が支持された。関係性目標は，学習効果との間に一定の相関関係があったが，関係性目標それ自体は学習効果に影響を及ぼしてはいなかった。幼稚園教諭志望学生の関係性目標は，教職を志す者が根源的に持つ利他的動機づけと考えられるが，学習効果という観点では，マスタリー目標のような自己の能力を伸ばすことを重視とした目標が有効であることが示唆された。

本研究は，恐らく教師の達成目標志向性の概念を幼児教育分野へ拡大し尺度作成を行った最初の研究であり，その点において，本研究の意義を見出すことができる。しかしながら，本研究の課題や限界として，以下の三点を指摘したい。

第一に，サンプルの問題である。本研究の対象者は，1校から得られた少数データであり，さらに，MTの演習履修者に限定されていた。そのため，学校や履修者集団の特殊性が反映された可能性があり，尺度の一般化には慎重にならざるを得ない。また，対象者は現職の幼稚園教諭ではなく幼稚園教職志望学生であり，その多くが女性であった（男性16名，女性95名）。そのため，男女差の検討が困難であり，現職の幼稚園教諭との比較検討を行うという課題も残された。先行研究において，現職教師と教育実習生は同様の因子構造であること（Nische et al., 2011），女性教師は，男性教師よりもマスタリー目標やパフォーマンス回避目標が高いこと（Butler, 2007），中学・高校の数学教師は，他の教科（体育，外国語，物理）や小学校の教師よりもパフォーマンス回避目標が低いこと（Papaioannou & Christodoulidis, 2007）など，属性による様々な異同が確認されている。今後は，サンプル数を増やし，対象者の属性を拡大することにより，本研究の追試を行っていきたい。

第二に，新たに作成した幼稚園教諭志望学生版達成目標志向性尺度の妥当性の検討が不十分であることが挙げられる。本研究では，仮説通り，マスタリー目標と学習効果との間に一貫した関連が見られたものの，マスタリー目標以外の3下位尺度に関しては，どのような変数と関連するのか明示することはできなかった。今後は，他の変数との関係を明らかにし，尺度の妥当性を高める必要がある。例えば，先行研究では，教師の達成目標は，援助要請スタイルやコーピングスタイルなどの困難場面における対処方法（Parker et al., 2012; Butler, 2007），仕事満足度やバーンアウトなどの精神的健康（Retelsdolf et al., 2010; Papaioannou & Christodoulidis, 2007），教師効力や興味などの動機づけ（Nische et al., 2012; Retelsdolf et al., 2010），子どもに対する指導スタイルやソーシャルサポート（Butler & Shibaz, 2014, 2008; Retelsdorf & Günther, 2011）など，あらゆる変数と関連することが分かっている。また，マスタリー目標は，比較的に認知的葛藤や興味の誘発など“子どもの学習”に関する側面に強い影響を及ぼす一方で，関係性目標は，社会的サポートや子どもからの援助要請など“子どもとの関係性”に関する側面を促すことが示されている（Butler & Shibaz, 2014）。このように，マスタリー目標と関係性目標は，共に肯定的な性質を有する目標ではあるが，各々で異なる動機づけシステムである可能性が示唆されている。今後は，これら先行研究で扱われてきた指標や研究成果と照らし合わせながら考察を行い，各下位尺度の妥当性の検証を重ねていく必要がある。

第三に，講義後の1時点での質問紙調査による検討に留まっている点である。本研究では，理論的背景から，学生の達成目標志向性と学習効果の間に因果関係を想定した重回帰分析を採用した。ただし，両変数は同時点で測定されており，今後は時間差や因果関係を明確にするために，縦断調査や実験による手法を導入する必要がある。また，MTの学習効果を，学生の自己評定のみで測定したため，評定者の反応バイアスが生じた可能性は否めない。今後はグループワークにおける行動観察の記録やテストなど，より客観性の高い指標を用いることも課題の一つと考えられる。

謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様方，また，本研究の執筆にあたり多大なるご尽力を賜りました慶應義塾大学の鹿毛雅治教授に対しまして，心より感謝の意を申し上げます。

注

1) マスタリー目標，パフォーマンス接近目標，パフォーマンス回避目標の呼称は，各研究者により異なるものの，本研究ではこれら3つの用語に統一して用いることにする。

2) 金子（2013）は，実際の幼児を指導する場合をMTとして区別している。

引用文献

Butler, R. (2012). Striving to connect: Extending an achievement goal approach to teacher motivation to include relational goals for teaching. *Journal of Educational Psychology*, **104**, 726–742.

Butler, R. (2007). Teachers' achievement goal orientations and associations with teachers' help seeking: Examination of a novel approach to teacher motivation. *Journal of Educational Psychology*, **99**, 241–252.

Butler, R., & Shibaz, L. (2014). Striving to connect and striving to learn: Influences of relational and mastery goals for teaching on teacher behaviors and student interest and help seeking. *International Journal of Educational Research*, **65**, 41–53.

Butler, R., & Shibaz, L. (2008). Achievement goals for teaching as predictors of students' perceptions of instructional practices and students' help seeking and cheating. *Learning&Instruction*, **18**, 453–467.

金子智栄子 (2013). 保育者の力量形成に関する実証的研究―有効な保育者養成と現職研修のあり方を求めて―　風間書房

Papaioannou, A., & Christodoulidis, T. (2007). A measure of teachers' achievement goals. *Educational Psychology*, **27**, 349–361.

Parker, P.D., Martin, A.J., Colmar, S., & Liem, G.A. (2012). Teachers' workplace well-being: Exploring a process model of goal orientation, coping behavior, engagement, and burnout. *Teaching and Teacher Education: An International Journal of Research and Studies*, **28**, 503–513.

Retelsdorf, J., & Günther, C. (2011). Achievement goals for teaching and teachers reference norms: Relations with instructional practices. *Teaching and Teacher Education*, **27**, 1111–1119.

Retelsdorf, J., Butler, R., Streblow, L., & Schiefele, U. (2010). Teachers' goal orientations for teaching: Associations with instructional practices, interest in teaching and burnout. *Learning and Instruction*, **20**, 30–46.

Richardson, P.W., Karabenick, S.A., & Watt, H.M.G. (2014). *Teacher motivation: Theory and practice*. New York, NY: Routledge.

Murayama, K., Elliot, A.J., & Friedman, R. (2012). Achevement goals. In R.M. Ryan (Ed.) *The oxford handbook of human motivation* (pp. 191–207). Oxford, UK: Oxford University Press.

村山航 (2003). 達成目標理論の変遷と展望―「緩い統合」という視座からのアプローチ―　心理学評論，**46**, 564–583.

Nische, S., Dickhäuser, O., Fasching, M.S., & Dresel, M. (2011). Rethinking teachers' goal orientations: Conceptual and methodological enhancements. *Learning and Instruction*, **21**, 574–586.

Watt, H.M.G., Richardson, P.W., & Wilkins, K. (2014). Profiles of professional engagement and career development aspirations among USA preservice teachers. *International Journal of Educational Research*, **65**, 23–40.

Watt, H.M.G., & Richardson, P.W. (2008). Motivation, perceptions, and aspirations concerning teaching as a career for different types of beginning teachers. *Learning and Instruction*, **18**, 408–428.